

「其れが宜しうございませう」と髪結。

「緋の羽二重にませうか」

「お上品で宜しうございますね」とお勝。

「餘まり儀式ばりやしない？」

「どう致しまして無地の御長襦袢は御平常にもお目出度の時にも、何方にも向くのでございませうから」

次に着物！次に帯！其の度毎に三人は頭を惱ました。而して「上品でございませう」といふのが結論に歸した。羽織を着やうか外套を着やうか、被布にしやうか是れが最後の問題で、到頭羽織の上に半外套と決した。思ひ切て高く蕨を紺地に染め出し其れに蝶を對照つた裾模様様の袷に埃及模様を青磁コルバルトで織出した絲錦の帯を締めて、其れに落花に馬蹄の模様あるお召の半外套を着た。

「仍且光琳風は上品だね」とお時は染々と環の姿を見惚れる様に言た。

彼女は埃及式でも有職式でも何でも眼に立て好いものは光琳風だ。光琳といふ人は此頃外國から歸つた人で日本にハイカラを擴めた人だと思つて居る。

「ほう、奇麗く」と總五郎は煙管を片手にやつて來た。「なる程、奇麗だ、是でまあ中店位にはなつた、酒肴小物付で圓助といふ玉だね」

「何ですつて？」とお時は眉を動かして。

「貴方は私の氣に障る様な事ばかり仰やるのね」

「爾か、俺は又た什麼いふ故だかお前の氣に障る様な事ばかり言ひたいんだよ」

「何故ですか」

「病だね、病は癒らねえや、丁度お前が篤子を苛める様なものさね」

「人間の悪い事を仰やるな、私は何時篤子を苛めました」

「苛めなけれや其れで可いが、どうだい、今日は篤子にも仍且模様の着物を着せ

るだらうね」

「篤子の事は去年から私が手を退きましたから知りませんよ」

「爾か、其れちや可い」

恚う言て總五郎は篤子を召だ。

三

二人が又もや争論ひにならうとする時、篤子の姿が現はれた。

「伯母さん是れで宜しうございますか」

めりんすの襦袢に、其れでも今日は晴の日とて羽二重の白襟を掛けた彼女は自分の縫ふた針の跡を見らるゝを耻づる様に前に出した。

「今時分持て来て什麼するの？ 昨夜の中に何故掛けて置かなかつたの？」とお時は疊んだ襦袢を見向きもしない。

「昨夜伺はうと思ひましたら伯母さんはお寢み下したから」

「此位の事私に聞かなくなつて可いちやありませんか、何の爲に學校でお裁縫を習つてゐるんです」

「まあ可い」と總五郎はぢろくお時を見て嘲る様にややく笑つた。

「早く支度をなさい」

「はい、御風呂を頂いても宜しうございますか」

「まだ入らないの？」

「えい、環さんがお入りになるのを待て居ましたので」

お時は黙つた。總五郎は此處ぞと何か言はうとしたが一霎時喘息の咳が差し込んで来たので顔を眞赤にして苦しがつた。

「どれ〜篤子の襦袢をお見せ」と彼は漸く胸を擦つて手を伸ばし、「なる程好い襦袢だ、胴がめりんすで襟が羽二重で袖だけは縮緬だが、大分發氣油の跡が見えるな」

「あら御祖父さん」と篤子は耳根を染めて狎へる様に笑つた。

「まあ可いさ、胴が虎で頭が猿で尻尾が蛇なら頼政に退治られるんだ、お前の伯母さんは中々見立が好い、枕の襦袢なんて珍柄だね、併し是は環に着せる方が似

合ふせ」

「失敬だわね」と環は姿見に向きながら言た。

「碌な事を言やしない」とお時は煙管を壘の上に抛つて、急須の茶を音立て、茶碗に酌ぐ。

「なあ篤子」と總五郎は胡坐を掻き直して「お前も着物が欲しいだらう、何故買て貰はないんだ」

「だつて御祖父さん、着物なんか」

「欲しくないか」

「欲しいわ」

「學校卒業の御褒美に買て貰はなかつたのか」

「だつて要らないんですもの」

「御祖父さんが買てやらうか」

「可いわ、要る時になつたら伯母さんがどいさるから」

「爾か、其れは何時の時だらうなハ、」と總五郎は笑つて、「では御褒美に何でも好きなものを與らう、言て見な」

「好きなもの？」

「お芋に南瓜 蒟蒻にお芝居」

「そんなものは厭よ」

「芝居も嫌か」

「私見た事が無いんですもの」

「其れぢや何が欲しい」

「爾ね」と篤子は凝と考へて、「私一つ御願がありますわ」

「なんだ」

「あのね、私、乳母の許へ一返行らして戴きたいの」

「乳母の許へ？」

總五郎はお時の顔をちらりと見やつた。

「風呂へ入らないかへ」とお時は怒鳴た。

「はい只今」

篤子は氣を残して風呂場へと急いだ。後は總五郎とお時、時大きな聲の出るまで争つたが、篤子が風呂を出る時は二人の姿が見えなかつた。獨り髪を搔いて獨り例の襦袢を着物に襲ね、獨り帯をしめて袴を着け静に鏡に向つてると玄關の方で再び總五郎とお時の争ふ聲が聞える。

「どうして恁那に伯母さんとお祖父さんと仲が悪いんだらう」

恁う思ふと急に悲しくなつて涙が緩く頬を傳つた。

「行て被行やいまし」

「行て被行やいまし」

女中共や髪結、五六人の聲がすると間もなく自動車の音が刻み出す。此時篤子は前の悲みから漸く冷めた。而して花やかに着飾つた環と其れを嘗めたい様な眼さしをして並んで坐つてゐる伯母の顔を想ひ續けたが彼女は急に大きな罪でも犯したかの如く身慄して立上つた。

## 四

電車を降りて會場へ行くと、場内は早や歡樂の聲と綺羅の光に漲つて居た。「玉蘭女學校學友會々場」石棧流に書いた立札が、門柱に交叉した大きな日章旗の下に見える。其處を往きつ戻りつする若い人達の姿は如何にも活々と喜びに溢れて居る。篤子は自分の胸に着けた櫻の徽章を睇めては一種の矜持を感じた。何だか慙う自分の學校が東京中で一番豪い學校の様、其の生徒たる自分は肩身が広い様、而して彼女は心の底から湧き立つ嬉しさを顔に隠しきれず、逢ふ人毎に嫣然して見せた。

古物ではあるけれども紋羽二重の紋付にカシミヤの袴、袴の裾には白糸で二筋横に縫ふてある、其の白い糸が如何にも清く春日に輝やいて居るのが殊更らに嬉しい。自分が掛けた白襟、縮緬の襦袢の袖、其等まで何となく晴がましい。羽二

重や縮緬を身に着けたのは生れてから初めていある。「環さんの様には立派でないけれども、随分美しい衣服だわ」彼女は憚うも思つた。

だが其れは束の間で、彼女は控室へ入ると既う眼が眩めく程に美々しく装ふて人達を見た。平素に綿服を着てる人達でさへ、見違へる許の綺羅びやかさ、黒い頭に黄金の光、翡翠の緑、紅玉の燦めき、首筋の白粉、白の襟、胸模様、裾模様、絹の足袋、西陣の帯に賣はる種々の金具、鎖、恰がらに雛人形を並べた様。篤子は初めは其等の美しさに錦繪を見る様に感じ入た。而して次第に自分の姿に氣が付くと、冷汗を掻く様な恥かしさが泌々と起つて来る。晩春の眞晝の光が天幕を外れて漲り照らすと、篤子の色揚げをした紋羽二重が、擦れ毛が立て地が薄く紋の輪廓だけが色がいやに黒すんでるのさへ容赦なく見透かされる様な氣がした。「着物の事なんか什麼でも可い」幾度か憚う口に言て勇氣を呼び起すものゝ、篤子も女である、他の人達が是見よがしに着飾つてるのを見ると段々肩身が狭くな

つて坐に居た、まれなくなつて來た。

「私にも母様があつたら……御父様が死な、かつたら」

彼は孤獨の心持に堪へきれなくなつた、而して、多くの人々の中に自分の様に粗末な身装をしてる人が無からうかと心の中で同じ境遇の人を探す様になつた。彼は人々と遠く室を出て若楓の下に立て居た。

今しも室の内外は一種の動搖めきを起して人々の視線が築山の方に注がれた。其處へ來たのは大村博士の令嬢富喜子と其の母親であつた。富喜子は例の縮れ毛を巧みに迂曲らして前髪を洋犬の耳の様に垂れて額の兩角を隠し、片手には琥珀織分の洋傘を持って、片方の腕環時計を嵌めた手に焼畫のオペラバツクを提げて居る。其れさへあるに孔雀の裾模様、草花を肩の上まで染めた着物と、菜の花の黄に蝶の金銀を飛ばした帯は遠くから見ると只だ一面の繪具皿が浮き出した様である。

「まあ立派だ事」婦人達は吾を忘れて讚歎すると、若殿原は光に打たれた羽蟲の  
様、浮色立て眼玉が忙がしく廻轉する。

「やあ能うこそ被來して下さいました」

校長は素早く人を推分けて挨拶をする。

「どうもお蔭様を持ちまして……」

頭をびよ、動かしては饒舌り續けてる處へお時と環の姿が見えた。盛装し  
た環の姿はお時の眼には天女より美しく見える。彼女は前に立つ篤子の背後を眺  
めては他の女達と見比べる、而して一々小聲で環に注意するのである。

「もつと肩を落して……もう少し曲み腰になつて……笑顔を作つて笑顔……」

「煩さいわよ」と環は背後も向かず横に顔を動かして答める様に言ふ。

「まあ、是は御嬢様」と校長は聲を掛けた、二人は立止つた。

「御紹介致します、此方が南さんの奥様と御令嬢で、此方が大村博士の……」

「まあ左様でございますか」と双方の母親が同時に衣紋を作つて笑顔を向けた、  
環と富喜子との挨拶も済んだ。大村博士は南家へは多年出入の間柄である、元よ  
りハイカラな娘があるといふ事は御互に承知して居る、承知して居ながら初めて  
逢つて互に噂よりも酷しいハイカラなのに驚いた。而して富喜子と環が互にこ  
ゝ話してる中にも油断なく相手の缺點を探し廻る。

「まあ何て御奇麗で被居やるんでせう」とお時が言ふ。

「什麼致しまして御嬢様こそ……」

母親は母親同志で御世辭を振蒔きながら「なあに扮装が立派でも縮つ毛は恐れ  
入る」とお時が思へば、「いやに上品振ても何處かに下卑た處がある」と大村夫人  
が思つて居る。

「どうぞ御遊びに被來つて」

「どうぞ私共へも」

二組は左右に別れた、而して一二間離れると互に背後を振返つて「ふん」と肚の中で笑つた。

## 五

會場は人の出盛りである。貴顯紳士淑女、暮れ行く春は此の星が岡に駐まるかの様、中にも眼に立つのは環と富喜子であつた。

「あれは何處の方？」

「まあ立派な事！」

人々の羨望の聲が聞える毎に二人の母は顔の紐を弛めた。

篤子は一人取残された様に楓の下に立ちながら奇妙に淋しい思に驅られた。別に綺羅を羨やむでもないが今日に限つて人々と自分とは大變に異つてる様に思はれる。美しく着飾つた人の群集に抛げ出された耻かしさ、篤子には恚ういふ事を思つた事は今まで一度もなかつた。

「あら篤子さん」呼掛けられて振向くと其處に同級生の野口秀子といふのが立て



居た。平素篤子と仲好で篤子よりは二歳も年長である、脊丈の矮さいのと毎も沈黙してるので校内の異り者と呼なされて居る。

「どうして？ 彼方へ行かないの？」

「えい、行ても耻を搔く許ですから」

篤子には其の意味が解つた、袖に松竹梅の模様ある黒木綿の紋付で、袴は時好後の海老茶、羽織のないのは篤子と同じだが、袖丈が合はぬかしてめりんすの襦袢の袖が煩さく食み出す。秀子は其れを氣にして引込めながら涙ぐむだ眼をして語つた。

「私、接待係は厭だと言たんですけれども皆なで選舉して、其れで今日來て見ると餘興係の方へ行てくれといふんでせう、餘興係へ行くと案内者になれといふんですもの、私解つたのよ、私此那身装をしてるもんだから皆なが厭がるのよ、校長さんまでが私を馬鹿にするんですもの」

「氣の毒だ」と篤子は思つた、同時に身装の悪い自分の様な境遇の人が他にもあるのを見て幾分か心強さが感じた。

「其那事を言てもねえ秀子さん、身装が悪いたつて別に體裁が悪いといふ法はないんですからね、其那事は氣に掛けないで面白く遊びませうよ、ね」

秀子を慰さめてる中に篤子は段々自分の氣も引立て來た。而して二人は手を曳き合つて芝生の上を歩き廻つた。折々喝采と笑聲が廣間の方に漲ぎる。秀子は其度毎に口惜しさうに振向いた。

丁度其時環母子と富喜子母子が再び泉水の邊に出會つて舌と舌とを戦はして居た。此邊じめくとした濕地で盛砂の底に水の氣が多い。

「あら大變だわ草履が濡れたわ」と環が言ふ。

「私も大變よ」と富喜子が言ふ。

赤い鼻緒の上草履の底から冷たさが見る／＼足袋の底まで襲ひ來る。二人の母

親も當惑した。草履を脱ぐ事も出来ず、左りとて足袋を脱ぐ事もならぬ。

「篤子さん」と環が篤子の姿を見掛けて呼んだ。「自動車の中に千代田草履があるから持て来て」

篤子には充分聞き取れなかつた。

「なあに」と言ひながら急ぎ来る。

「自動車よ、草履よ、持て来るのよ」と氣短に言ふ。

「どうして？」篤子は仍且意味が解らぬ。

「文句を言はずに持て来いと言はれたら持てお出なさい」とお時が言ふ。

「はい」篤子は漸と解つた。

「其れからね、大村さんの御嬢様のもね」

篤子は一旦返した踵を再び向け直して眞直に立た。

「富喜子さんのもの？」

「えい爾です」

「澄みません」と富喜子の母が言た。

けれども篤子は黙つて居た。

「何といふ顔をするんです」とお時が言ふ。篤子は仍且黙つて其處を去た。

後で四人の御世辭が又たく交換された、而して話は何時の間にか篤子の噂に移つた。

「中々御器量も好くて被居やるし、其れに何でも能く御出来になるさうで……ねえ富喜子」

「其りや中々御利巧よ」

「其れに御聲が大變に美くて被居やるとかで娘が始終羨やんで居りますよ」

篤子を賞めれば賞める程お時母子の顔が曇つて来る。大村夫人は其れに氣が付かなかつた。

「音楽學校へでも御入れになる御積でございますか、全く藝事は生れつきでございますからね、宅の娘……」

爾でございませよ、藝事は生れつきでございますよ」

「爾だわね」と環は母の言葉を遮ぎつた。「生れ付きですわね、篤子さんは仍且藝者の腹から生れたんですから」

「環さん」とお時は制する様に。「何を言ふんです」

「まあ篤子さんは藝者の……」と富喜子は吻とした様に眼を据ゑて。「まあ藝者の……其れだから聲が好いのかしら、私今まで肺病……」と言ひ掛けたが慌て、口を噤んだ。

「さあ草履は何履したんだらう」お時は苛々して。「仕様のない子でございますよ、立てると水が泌みますから彼方へ参りませう」

篤子は門口へ出て、車寄を見廻つた。蠟塗の馬車、人車、自動車、馬の足掻、車體の眞鍮の光、赤や青の縁の付いた服を着た馭者、運轉手、砂利を軋る音、供の衆を呼ばはる聲、其處にも賑はしい春が見えて居た。

「早くしなければ間に合はない」篤子は混雑した車の間を抜けて環と富喜子の自動車を探し廻つた。彼女は憊ういふ事には慣れて居なかつた、運轉手共は手ん手に供待所で丁半を闘はして居るには無論氣が付くべき筈がない。漸との事で二人の千代田草履を運轉手共から受取つたのは既う二十分も過ぎた頃であつた。

「どんなに待て居らつしやるだらう」と篤子は群衆を潜り抜けて元との築山の方へ行た。泉水の傍には四人の姿も見えない、と、其處に秀子が一人茫然立て遙かに會場を往來する美装の人達を淋しさうに眺めて居た。

「富喜子さんや何かは何處へ行つて？」

「私知らないわ」

「困つたわ」

「篤子さん」と彼女は呼吸を喘まして近寄た。

「貴方は彼那人達の草履取なの？打捨つて御了ひなさいよ、本當に人を馬鹿にし

てるわよ」

「だつて皆なが困るから」

「腹が立たなくて？」

「私其那に腹が立たないわ」

秀子は呆れた様に眼をぱちくりさした直ぐ後を向けて。「貴方はお人好だわねえ」

篤子は二足の草履を抱へたまゝ會場へと立戻つた。接待の人に富喜子さんは？と訊くと今しがた門の方へ出たといふ。篤子は再び門へと急いだ。丁度此時富喜子が環母子に伴れられて同じ自動車で南家へ遊びに行く相談が纏まつた處であつた。

「御母様、貴方は一人で御歸りなさいね」

「あゝ好いとも……どうぞ宜敷」と大村夫人が會釋して。「すつかり氣が合つて了

つたと見えまして……我儘者ですから……」

「えい、後程手前共からお送り申しますから御心配なく」

美しい二人とお時は自動車に乗った。發動機が唸る様に荒い音を立てた。

途端に篤子は飛ぶが如く踏臺の前に近寄った。

「草履を……環さん……草履を……富喜子さん」

「もう要らないわ」と環が言ふ。

「要らないよ」とお時と言ふ。

「でも伯母さん」

「要らないと言たら要らないよ、早くやつてお呉れ」と運轉手に聲をかける。車は動き出した。篤子は黙つて草履を三人の足元へ入れやうとする。

「何をするんです」

手を拂ふ拍子に四つの草履は篤子の横顔を掠めてばらばらと前に落ちる。

自動車は土煙を立てて駛り去た。

「酷い奴だな畜生め」と車夫や馬丁共が罵つた。篤子は腹立たしさよりも羞かしさが充滿になつて顔を赧めながら散らばつた草履を拾ひ上げ足を戻し、前の若楓の下に茫然と立つた。彼女は人の氣のない處で思ふ存分泣いて見たいと思つたのである。此時彼女の十歩許前に現はれた二人の人があつた。

「あゝ御嬢ちゃん」

「あゝ文ちゃん、乳母！」

夢かと許り篤子は驚いた、お濱と文太郎の熱い手が左右から握られた。而して雲時何にも言はずに顔を見合つた。

「これがお嬢ちやんかい、是が……」

お濱は魚の鱗の様に鈍色に曇つた眼を睜らきくして毫でも其れらしい姿を見たいものだとな努むるものゝ如く忙がしく眼球を動かした。

「乳母は眼が悪いつてね、什麼？」

と篤子は故意と乳母の顔に自分の顔を寄せた。

「仍且御嬢ちやんですね、仍且お嬢ちやんで」

乳母は袴と抱付いて攀上る様に篤子の胸を抱て見上げる。光のない眼の中から止度なく涙が流れる。

「些とは見えるの？」

「えい些とは見えます、お顔だけが朦朧と……だけれどもお嬢ちやんの眼が、あの御可愛いお眼が見えません、何故来て下さらなかつたんです、何故乳母が眼が見えてる中に」

篤子ははら／＼と涙を零した、而して濡れた頬を益々びつたりと乳母の顔に摺付けた。文太郎は黙つて是も泣いて居る。

「濟まない事を言ひました」と乳母は雲時あつて篤子から顔を離した。

「恁那事を申上げるのではなかつたのですが、お嬢ちやん御免なさいまし」

「什麼して能くまあ来てくれたの？私どんなにか會ひたかつたらう、會ひたいと思つても行かれないもんだから」

「知て居ます、仙どんの手紙で能く御動靜が解つて居ます、今日も仙どんから切符を送つて呉れたもんですから」と文太郎が言ふ。

「でもまあ御身大きくおなりになりましたねえ」

お濱は文太郎と篤子の話には構ひ付けず、篤子の腰の邊りから胸、腕、首筋を手探りに撫で廻す。篤子は乳母の爲すが儘に身體を任せながら櫛ぐつたさを堪へて居ると、乳母は身體中を舐りたさうに、只にこゝく笑みかけては涙を拭きくして居る。

「ねえ文太郎、お嬢ちゃんは随分大きいかね」

「僕と同じ位ですよ」

「お前と同じ位？まあ爾那にかへ、瘡せては被居やらない様だね」

「あゝ、肥つても居ませんよ」

篤子と文太郎は聲を出して笑つた。

「お髪は何だい」

「僕は知らないや、束髪だらう？」

「えい爾よ」と篤子。

「で御召物は？」

「何でも好い着物だよ」

篤子は黙つて俯向いた。

「爾だらうとも、いくら何でも縮緬や羽二重位はお着せ申さなければ濟まない事だ、御器量好で被居やるから環さんと同じものをお召になつても、此方の方がずつと引立ちますよ、ねえ文太郎皆様が御嬢ちゃんの方を見るだらう」

「爾那事は知らないよ」

「いゝや、其れに違ひない、何處へ被行つたつて屹度目に立つ御器量だ、お鼻が高くて被居やるだらう、お眼が涼しくて、御口元が……」

「お母さん、もうお止しよ爾那事」

「ちや御嬢ちゃんはお奇麗で被居しやらないといふのか」

「其れや奇麗だよ」

「今日此處で見た誰よりも」

「勿論爾さ」

又もや二人は笑つた。乳母は平氣で續ける。

「御目に掛らない中は一年が十年よりも長いと思ひましたが、お目に掛ると六年は昨日の様ですよ、ねえ御嬢ちやん、其れでも能くお嬢ちやんの方から御言葉を お掛けなすつて下さいました、仍且乳母を御忘れにならずにね、爾でせう、え、 爾でせう、乳母を御忘れにはならないでせう」

爾と知りつゝも當人の口から言つて貰ひたさに解りきつた事を繰返す。

「忘れやしないわ、私どうしたつて乳母を忘れられやしないわ」

乳母は感極まつて何も言へなくなつた。

「だから私、一人前になつたら乳母と一緒に暮らすのよ、其れまでね待てゝお呉

れよね、御醫者さんに掛つて眼を直してね」

「難有うございます、難有うございます」

お濱の聲は涙で曇つた。「難有うございます、私の眼なんかは潰れても構ひませ んけれども……」何か言はうとして又た考へ直し「して御嬢ちやんは何處ぞへ御 縁組のお話でも」

「なあに？乳母」

「御嫁入の御話は？」

「知らない」と篤子は顔を赧めて文太郎の方をちらと見やつた。見られた文太郎 は其の視線を避ける様に横を向いた。

「くだらない事を言ふのは御止しよお母さん」



會場は一しきり狂する様に歡喜の聲を擧げたが間もなく琴や三味線の音に代つて、肅然と静まり返る。紅白咲き亂れた躑躅の隙間から若い男女の頭だけが美しく波を打てるのが見える。三人は小聲に猶も語つた。語れば語る程話が盡きない。三人は同じ様に虎公の行方を氣遣つた。淺蟲の懷舊に涙を絞つた、而して何時になつたら昔の様に睦ましく暮らせるだらう。一人は惡漢に攫はれて東西に流れ渡り空腹を抱へて日蔭へくと落ちて行く。一人は盲の母を背負ふて植木の人足となり其日くの生計にさへ困つて居る。而して一人は父の遺した我が家に住みながら弱い身體の置き所もない。

「みんなもう些と幸福になるだらうと思つたが仍且駄目だ」と文太郎は歎息した。お濱は眼を瞬たゝきながら泌々と篤子の生れた當時の事などを語つた。恐ろしい

吹雪の夜、淺蟲の小驛は凍て付いた様に軒漏る灯影もない時に、篤子の父と母がホテルへ宿つた事から、其れから自分が乳母になつた顛末！病に疲れた身は堪へ情もなく平素に言はなかつた事迄涙と共に言て了ふ。

突然として篤子は訊ねた。

「乳母！私のお母さんは什麼な人？」

「貴方に勞弊でございましたよ、まあ什麼なにお美しくつて被居したでせう」

「いゝえお母さんは何處の人で、什麼な家からお嫁になつて被來つたの？」

「あの：：其れは：：」お濱は行塞つた。

「お母様は藝者でなかつたの？」

「いゝえ〜」とお濱は顔を兩手に隠した。

「秘しても駄目だ、言て了ふが可いよ」と文太郎が聲を頓はした。「お嬢ちゃん、其の通りですよ」

「藝者なの？」

「爾です」

「藝者？藝者？ちや仍且爾なんだわね」

静に言た積だが篤子の聲は銀の針の如く鋭く顔へた。と彼女は兩手に確と胸を抑へて肩に深い呼吸を堪へ様としたが彼女の身體は脆くも前に倒れながらも乳母の膝に顔を埋めて了つた。

「悪い事を言ひましたね」と文太郎は篤子の傍に手を突く様に首低れて

「お嬢ちやんに嘘を吐いては濟みませんからな」

「私歸らない」と篤子は顔も上げずに。「乳母一緒に行かう、乳母の處へ一緒に行かう」

「何を仰しやるんです」とお濱は驚いて大きな聲を出した。

「いゝえ私もう家へは歸らない、私藝者の子なんだもの、ねえ乳母、私明日から

學校へも行かれないわ」

幼さい時から御祖父さんの不行跡を見るに付け、酒の座でお時が踊つて居たのを見るに付け、宿り込みの翌朝細帯一つで楊枝を啣へて居た藝者を見るに付け、其れから小學校の先生から藝者は女の中で一番不可いものだと言はれた事を思ふに付け藝者ほど卑しむべく耻づべき者はないと信じて居た。其の卑しき女は自分の母である、今までお時の口から其那事を聞かされぬではなかつたが、其れは單に悪口の形容詞に過ぎぬと思つて居た。其れが形容詞でなく事實である、汚らしい腹から自分が生れたのである。其れとも知らずに人並の人の子の積で居た今日までの自分が耻かしい。環さんに什麼して顔が合はされやう、富喜子さんに、學校の人達に……而して……力さんに……。

篤子の頭は一時に亂れた。

「伴れて行て頂戴、乳母、乳母、ねえ乳母」

「其れが可いや、お嬢ちゃん一緒に行きませう、なあに虎さんを探し出して二人で稼いだら御嬢ちゃんに不自由させる様な事はしません」と文太郎は言た。

## 九

「お濱は黙つて何にも言はなかつたが、此時篤子の脊中を擦りながら静かに言た。

「其りや不可せんお嬢ちゃん」

「どうして？」

「貴方に其那事をおさせ申す位なら乳母は此那苦勞は致しません」

「可いぢやないの乳母、私ね〜」篤子は昂奮した眼を凝とお濱に向けた。「私は藝者の子なんだもの、私のお母様は私を棄てたんだもの、御父様だつて私をお前の處へ置いてきぼりにしたんぢやなくつて？私に御父様も御母様も無い、乳母、乳母だけが私の御母様よ、本當のお母様よ、ねえ、お母様になつて頂戴、私もう何にも要らないわ、乳母さへあれば私もう……」

一語は一語より激して篤子の眼には涙さへなかつた。お濱も最早泣かなかつた。

而して顔色が次第に蒼白めて唇が烈く引釣る様に動いた。

「不可せん」と彼女は叱る様に言つた。「貴方が私の處へ被來つた處で什麼なりま  
すか、見すく御困りになるのは解つて居ます」

「困つたつて可いわ、私も什麼な仕事でもしてお錢を取るわ」

「お嬢ちゃん、貴方にはね、其那事をなさるより御父様の跡目を御繼ぎにならな  
ければならない大きな御役目がありでございます、其れを爲さらないと貴方が  
御父様に御不孝になる許でなく私が義理知らず思知らず犬畜生と言はれなければ  
なりません、貴方がお生れになつてから十八年の間といふものは私共親子が渴る  
死もせず愁うして生て居ますのは皆な御父様の御恩です、其れを思ひますとね、  
私だつて、私だつて御嬢様、貴方のお傍にお付き申して居たい位は辛抱しなき  
やなりませんし、貴方だつて御父様の爲に御辛抱なさらなきやなりません、其れ  
がお出来にならないと仰やるなら私はもう御嬢さんに御目に掛りません、乳母で

もありません、お濱でもありません、私は……死んでく死んで……」

一度に聲が破裂してお濱はわつと泣いた、泣いて篤子を我が膝から押しやつた。

「さあ文太郎、行きませう」

「お嬢ちゃんを置いてか」

「行くんだと言たら解らないの？」

お濱は立上がつた。

「乳母、其れちや私一緒に行かないわ」

「思ひ切つて下さいます？ 思ひ切つて？」

「だつて乳母に怒られると私何處へも行く事が出来ないんだもの、其代りお許し  
が出る様になつたらね」

「其時を樂みに乳母は御待ち申して居ますよ」

「だけれども」篤子は涙を拭いて立上がつた。

「だけれども私詰らないわ」又しても愚痴が昂み上げる。

「御辛抱遊ばせね」

「えい」

「お身體を御大切にね」

「えい」

「義理だの、絲瓜だの、詰らない事をするもんだなあ」と文太郎は横を向いて呟いた。

「若しもねえ御嬢さん、堪へ切れない程お辛うございましたら」と乳母は両手を延ばして篤子を抱きしめる様に近寄たが、又た踰躑と踏み戻した。

「もう行くの？」

「御機嫌好う」

篤子と母子は二三歩離れる。

「乳母！」

「御嬢ちゃん」と文太郎はつかつかと戻つて来る。「僕はく僕は……」

憊う言たが何か喉に塞まつて言へなくなつたので其儘足を返してお濱の手を取つた。

躑躅に夕日が赫と射して泉水の一ヶ所だけが眩ゆく輝いた。何時の間にか會場に人の影もなく、何處から集まるともなく鴉が五六羽散らばつた折詰の残香を啄ばひで居る。篤子は何時までも二人を見送つた。

「もう歸りませう」獨りで淋しく言て袴の塵を拂ふ途端、ばさりと袂から落ちた二足の草履！

「什麼して是を環さんと富喜子さんにお渡ししやう」

彼女は黙つて草履を見詰たまゝ雲時拾ひ上げる氣にもなれなかつた。

鳩  
の  
家  
上  
巻

昭和十四年一月十日印刷  
昭和十四年一月廿五日發行

鳩の家 上巻  
【定價 壹圓五拾錢】

— 製 復 許 不 —

著 者 佐 藤 紅 綠

發行者 東京市神田區神保町一ノ三〇  
大 谷 德 之 助

印刷者 東京市神田區神保町一ノ三〇  
大 洋 社 印 刷 部

發 行 所

東京市神田區神保町一ノ三〇  
大 洋 社 出 版 部  
振替東京五九〇二番

部 本 製 社 洋 大 ・ 本 製

大 洋 社 最 新 名 著

|               |               |               |                     |         |          |          |              |               |               |
|---------------|---------------|---------------|---------------------|---------|----------|----------|--------------|---------------|---------------|
| 賴山陽著<br>池邊義象譯 | 賴山陽著<br>池邊義象譯 | 賴山陽著<br>池邊義象譯 | 高橋北堂著<br>すくに<br>役立つ | 山口愛一著   | 松村英一編    | 松村英一編    | 白神白淵著        | 奈良益次郎著        | 奈良益次郎著        |
| 邦文日本外史 上卷     | 邦文日本外史 中卷     | 邦文日本外史 下卷     | 國民知識寶典              | 新譯源氏物語  | 新譯萬葉集 上卷 | 新譯萬葉集 下卷 | 六依ル法 諸願屆書式大成 | 新 鐵道旅行案内辭典 上卷 | 新 鐵道旅行案内辭典 下卷 |
| 定價壹圓七拾錢       | 定價壹圓七拾錢       | 定價壹圓七拾錢       | 定價壹圓五拾錢             | 定價貳圓五拾錢 | 定價壹圓八拾錢  | 定價壹圓八拾錢  | 定價壹圓五拾錢      | 定價壹圓八拾錢       | 定價壹圓八拾錢       |

大 洋 社 最 新 名 著

|                    |                 |                 |                    |                    |                    |                    |                    |                 |                 |
|--------------------|-----------------|-----------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----------------|-----------------|
| 窪田空穂著              | 澁川玄耳著           | 澁川玄耳著           | 小林篤里著              | 小林篤里著              | 小林篤里著              | 大隈博誠著              | 松尾五郎著              | 前田默鳳編著          | 庄野信治著           |
| 歌評釋と短歌隨見           | 支那那獵奇秘話         | 支那那哀怨秘史         | 豐臣秀吉               | 眞田幸村               | 高山彦九郎              | 必ず立身出世する 名前の附け方手引  | 必らず 株式相場の實戰術       | 眞行草字鑑           | 戰時 式辭挨拶手紙教本     |
| 新四六函入上製<br>定價壹圓八拾錢 | 新四六函入上製<br>定價參圓 | 新四六函入上製<br>定價參圓 | 新四六函入上製<br>定價壹圓貳拾錢 | 新四六函入上製<br>定價壹圓貳拾錢 | 新四六函入上製<br>定價壹圓貳拾錢 | 四六版函入上製<br>定價壹圓五拾錢 | 四六版函入上製<br>定價壹圓五拾錢 | 菊半截函入特製<br>定價貳圓 | 菊版上製<br>定價壹圓五拾錢 |

大 洋 社 版 絶 讚 文 學 書

|   |   |  |   |  |                                      |   |   |  |                                   |
|---|---|--|---|--|--------------------------------------|---|---|--|-----------------------------------|
| 宮島新三郎著<br>訂改<br>明治文學十二講<br>新四六全三三二頁<br>定價貳圓 | 宮島新三郎著<br>訂改<br>大正文學十四講<br>新四六全五二一頁<br>定價貳圓 | 宮島新三郎著<br>訂改<br>短篇小說新研究<br>新四六全二五七頁<br>定價壹圓貳拾錢 | 黑澤隆信著<br>芭蕉の歩んだ道<br>新四六判函入美本<br>定價壹圓五拾錢 | 黑澤隆信著<br>一茶俳句研究<br>新四六判函入美本<br>定價壹圓五拾錢 | 高濟虚子著<br>俳句入門<br>新四六判函入美本<br>定價壹圓五拾錢 | 内藤鳴雪著<br>俳句の作り方味ひ方<br>新四六判函入美本<br>定價壹圓五拾錢 | 正風俳句編<br>昭和精選<br>俳句大全<br>四六版函入上製<br>定價壹圓五拾錢 | 松村英一著<br>現代短歌辭典<br>新四六判函入美本<br>定價壹圓七拾錢 | 笛木謙治著<br>新譯古事記<br>菊金字函入特製<br>定價貳圓 |
|---|---|--|---|--|--------------------------------------|---|---|--|-----------------------------------|



387  
2  
647

終



大洋社版

